

ひなびた菩薩立像について

—本館蔵山口コレクション中国彫刻作品紹介—

山口コレクション中国彫刻は、北魏・天安元年銘如来坐像に代表される整った都ぶりの仏像から、北周・保定五年銘菩薩五尊像龕といった個性的で地方色豊かな作品まで、まさに多種多彩である。ここではその中でも特にクセのある仏像を紹介したい。

それがこの菩薩立像(図1)である。いわゆる砂岩系のもろい石質で、前面に高浮彫で一体の菩薩立像のみがあらわされ背面には何も刻まれていない。ご覧の通り一言でいってしまえば稚拙な造形で、制作された時代も地域もちょっと想像しがたい作品である。細長く大きな顔にだんご鼻、四つの渦巻が載る大きな頭飾を被り、細い両脚をかなり開いて立ち、両手で大きな花?を捧持している。両肩には先端がまるくカールする長い髪を垂らし肩から脚まで天衣(細長いショール)をX字状にかけているらしい。

この作品、1979年刊行の図録『山口コレクション中国石仏』では巻末の目録に記されるのみで、長らく展示されることもなかったようだ。その後2013年、図録『大阪市立美術館山口コレクション中国彫刻』でようやく画像を公開することが叶い、次のような関連作品が現存することから「作品番号053・菩薩立像・南北朝時代後期」とし、大まかに制作年代を想定した。

菩薩立像(図2)は1981年に中国寧夏回族自治区・彭陽県新集郷(当時の地名は固原県新集公社)から出土した作品である。本像も砂岩系のもろい石質で前面にのみ高浮彫され、細長い顔に大きな鼻、大ぶりの頭飾、そして両手で大きな供物?を捧げている。両肘下まで先端がまるくカールする長い髪を垂らし、両肩から脚まで天衣をX字状にかけている。総じて山口コレクションの菩薩立像(図1)に比べ緻密な線刻がなされているが、そのひなびた諸要素は両像に共通している特徴といえるだろう。彭陽県新集郷では、この菩薩立像(図2)を含め同様の菩薩立像があわせて三点同時に出土しており、いずれも紀年銘などは刻まれていないが報告書では北魏の作品とされる。

寧夏を中心都市は西夏王陵で知られる北部の銀川で、中国西北部に所在する回族(イスラム教徒)の多い地域である。この菩薩立像(図2)が出土した彭陽県は寧夏南部に位置し、今でこそ国家扶貧開発工作重点県(いわゆる貧困県)に指定されるが、長安(西安)を発ち西へ向かい河西回廊さらには西域へと至る、いわゆるシルクロードの要衝のひとつ、六盤山(寧夏、陝西、甘肅にまたがる山脈)にほど近い。

そうした交通路沿いに所在していることもあって、寧夏南部、



図1



図2

陝西北部、甘肅東部では北魏前期(5世紀後半)に遡る作品を含め数多くの石造仏教彫刻が発見されている。それらのごく少数の都ぶりで整った仏像を除き、ほとんどが地方色豊かな作品群である。このような状況から、まず仏教が広く浸透する中でお手本となる仏像が伝えられ、その後に各地でその土地の石匠により多くの仏像が造られるようになったと推測できる。1980年代以降、次から次へと個性的なひなびた仏像が出土し続けているが、菩薩立像(図2)もこうした作品のひとつであり、この地域ではあたかも石匠の数だけバリエーションがあるかのようである。

山口コレクション中国彫刻は山口謙四郎氏により大正から昭和にかけて収集されたが、近年中国各地で仏像が出土・発見されることにより、ようやくその価値と意義を確かめられる作品が少なからず含まれている。現時点で制作年代・制作地が不明な作品も残されているが、おそらく順次判明するのではないだろうか。こうした点も山口コレクション中国彫刻の面白さであり難しさでもあり、全貌の解明にはまだまだ時間がかかりそうである。

(齋藤龍一)

図1: 本館蔵品番号2925、現状の総高44.6cm、幅21.0cm。

図2出典:『中国美術全集彫塑編3魏晉南北朝雕塑』人民美術出版社1988年、図75。

参考文献:固原県文物站「固原県新集公社出土一批北魏仏教造像」『考古与文物』1984年第2期。